

アルバニア語北部方言の不定詞に見られる 形態および機能面の特徴

井 浦 伊知郎

1. アルバニア語における動詞の不定詞

アルバニア語を含むバルカン半島の諸言語にいくつかの共通の特徴があることは、「バルカン言語連合」の例としてよく知られている（名詞の後置定冠詞、人称代名詞による目的語の重叙、助動詞の非人称化、属格と与格の融合、形容詞比較級の『分析的』用法など）。その共通の特徴の中には「不定詞の消失」も含まれる（ルーマニア語を除く）。

たしかに現代アルバニア語（特に1972年以降の正書法にもとづく現代標準語）の規範文法では、動詞の不定詞 (paskajore 英 infinitive) は存在せず、英語の「to不定詞」や「原形不定詞」にあたるものとしては、「二次的不定詞 (secondary infinitive)」と言われる構文が存在するだけである、と述べられている (Domi 1995, 1997 他)。

(1) Ata erdhën në Shqipëri për të punuar me shokët.

they come-aor.pl.3 to Albania for work-part. with friends

「彼らは友人と働くためにアルバニアへやってきた」

また、他の西欧語では不定詞（原形不定詞も含む）を使うようなところで動詞の接続法が用いられるのも、アルバニア語のみならず、現代バルカン諸語の特徴の一つである。

(2) Ëndrra ime është të punoj në Shqipëri.

dream my be-sg.3 work-subj.sg.1 in Albania

「私の夢は（私が）アルバニアで働くことです」

(3) Ai duhet të takojë me atë shok.

they must meet with that friend.

「彼はその友人に会わなければならない」

(1)はアルバニア語の動詞 punoj「働く」の分詞 punuarを前置詞 për+小辞 të（接続法や属格、形容詞にも用いられる）と組み合わせたものであり、人称定形ではないものの、厳密には不定詞とは異なる（アルバニア語の動詞に過去分詞と現在分詞の区別はない）。

また(2)と(3)では、動詞 *punoj* や *takoj* の接続法現在が、主語に呼応して人称変化している。

なお、ここに動詞の「辞書形」としてあげた *punoj* や *takoj* も、あくまで直說法現在能動相1人称単数形であり、不定詞ではない。

もともと、中世のアルバニア語テキストには *me* を伴った不定詞が存在し、ごく普通に用いられていた。例えば前述の *punoj* であれば、不定詞は *me punuom* となる。アルバニア語の南部方言（トスク方言 *toskërishtja*）では、分詞を用いた「二次的不定詞」や、接続法による構文が優位となり、不定詞は消失した、と考えられている（Demiraj 1993他）。この観点から言えば、アルバニア語動詞の非屈折形には本文で扱う不定詞の他には、分詞、あるいは分詞を用いた「ジェルンド (*duke* + 分詞)」しかないということになる。

標準語はこの南部方言を基本にしているから、上記の事情に従えば、不定詞の用法が見られないのは当然のことといえる。しかし北部方言（ゲグ方言 *gegërishtja*）には不定詞が「規範外」の用法として現存する他、実は、標準語の中にも不定詞 (*me* + 分詞) を含む構文が見られるのである。そして、それらはしばしば規範文法で言及されるような「ごく例外的」なものではない。このことについては、特にここ十年余りの期間で、アルバニア語圏でも本格的な研究が始まっている。

そこで本稿では、まず北部方言に見られるこれら不定詞がいかなる形態を持ってあらわれるか、またいかなる機能を持つものであるかについて、主に先行研究をもとに示す。次に、標準語とされるいくつかのテキストから先行研究、及び筆者の調べた範囲で見受けられた不定詞、またはそれに順ずる構文をいくつかの例によって示し、それらがどのような機能を持ち、どの程度まで広く用いられているかについて、現時点で考えられることを述べる。

2. 北部方言における不定詞の例

2.1. 不定詞の分類と形態的特徴

前節で述べたように、本稿で扱うアルバニア語の不定詞は「*me* + 分詞」の構文で表される分析的なもの (*analytic infinite forms*) である。ここではまず、アルバニア語の分詞を用いた構文をその形態によって簡単に列挙しておく。

(N: northern dialect S: standard)

- ①不定詞；*me* + 分詞 (N) *me qenë* “to be”
- ②二次的不定詞；*për të* + 分詞 (S) *për të qenë* “to be”
- ③“Privative”；*pa* + 分詞 *pa qenë* “without being”
- ④“Absolutive”；*me të* + 分詞 “on ~ing”

(4) *me të mbiellë barën, priste bimën.* 「種を植えるとすぐ、草（が生えるの）を待った」

with sown-inf. seed wait-impf.sg.3 plant

⑤ジェルンド (përcjellore) ; tue (N) / duke (S) +分詞

(5) Ishte ngritur tue folë / duke folur. 「しゃべりながら立ち上がった」
get up-pf.sg.3 speak-gerund.

標準語では②を不定詞に順ずるものと見なしており、文法書によっては②（その否定形として③）を「不定詞」として説明するものもあるが、本稿で扱う「不定詞」とは①の用法をさす。③④⑤は英文法で通例言われるところと同様、分詞構文の一種と考えてよい。

2.2. 北部方言における不定詞構文の用法および機能

アルバニア語圏の北部（アルバニア共和国北部、コソヴォ、モンテネグロ南東部、マケドニア北西部など）で用いられるアルバニア語には、話し言葉でも書き言葉でも不定詞が頻繁に用いられている。これについては標準語文法においても指摘されており、また拙論（井浦 2001）でも北部シュコドラの会話テキストをもとに述べているが、ここで実際の話し言葉から書き取った例を示す（なお、本稿への再掲載にあたり語釈部分の“me+part.”をすべて“inf.”とする）。参考のため、考え得る標準語訳を(S)に続けて付す。

(6) Ma mirë me laimrue. 「(彼から) 連絡があればよいのだが」

more good inform-inf.

(S) Më mirë (që) të laimëroië.¹⁾

more good (that) inform-subj.sg.3

(7) Jepu njëçik me hangër.²⁾ 「彼らに何か (彼らが) 食べる (ための) 物をあげて」

give-imp.sg.2+pl.3.dat. a piece eat-inf.

(S) Jepu diçka të hanë. / për të hëngrë.

give-imp.sg.2+pl.3.dat. something eat-subj.pl.3 / for eat-part.

(8) A don me hangër?³⁾ 「(あなた) 食べたいの?」

(interrogative) want-sg.2 eat-inf.

(S) A do të hash?

(interrogative) want-sg.2 eat-subj.sg.2

(9) Kështu duhet me fol se... 「だから (ひとは) ～と言うべきだ、～のはずだ」

therefore must tell-inf.

(S) Kështu duhet të flasë.

therefore must tell-subj.sg.3

(10) Ç'ka me thënë?²⁾ 「何か言うことがあるかい?何か用かい?」

anything tell-inf.

(S) Ç'ka të thotë

anything tell-subj.sg.3

拙論でも既に述べているが、北部方言の話者も標準語を意識する場合には若干「切り替え」をおこなっている。ただしそれはジェルンドの“tue”を標準語の“duke”に変える程度で、「me+分詞」の不定詞構文はどのような発話状況でもきわめてよく保持されている。

筆者自身が実地に聞いた限りでも“Ç'ka me thënë?”や、そのヴァリエーションで“Ç'ka me bërë?”「何がしたい?」などは頻繁に使われており、むしろこれを接続法や通常分詞構文で“Ç'do të bësh?”や“Ç'do të bërë?”と発話する場面こそ皆無であった。

一方、書かれたテキストでは、1972年正書法を多かれ少なかれ意識しているためか不定詞の頻度は大幅に減少する。とはいえ、コソヴォにおける調査(モンテネグロ、スロヴェニアのアルバニア語出版物を含む)では、90年代以降の新聞雑誌で不定詞の使用例が増えており、ラジオ放送でも同様の傾向が確認されている(Veselaj 2000, 50ff.)。そこで示された動詞から、特に使用頻度が高いものとして指摘されているものをあげると、次の通りである。

abonohem > me u abonua 購読する

bëj > me bërë する、おこなう

blej > me ble 買う

gëzoj > me gëzuar 喜ばせる

gjej > me gjetë 見つける

kam > me pasë 持っている

krijoj > me krijuar 創造する

liroj > me lirue (liruar) 解放する

luftoj > me luftue 戦う

ndigjoj > me ndigju(e) 聞く(N)

nis > me nis(ë) 始める

punoj > me punue 働く

shikoj > me pa 見る

shkoj > me shku(e) 行く

shtie > me shti 差し込む

them > me thënë 言う

さらに80年代以前でも、コソヴォで出版された文書にはアルバニア共和国側のそれよりも不定詞の出現頻度が高く、例えば聖書やコーランのアルバニア語訳においても同様の傾向がある⁴⁾。

3. 標準アルバニア語における不定詞の形態・機能的特徴

上述のように、北部方言で不定詞が見られることはそれほど不思議なことではない。では、標準語では不定詞はどう扱われているだろうか。

結論から言えば、標準語でも不定詞の構文は決して皆無ではない。形態面では、大きく

分けると、①固定化された構文、およびいくつかの動詞に限って②「me+不定詞」の形が選択されている例がある。以下ではまずこれらの形態を具体的に示し、続いて、どのような機能的特徴を持つのかについて考察する。

3.1. 不定詞を含む固定化された構文

これは規範文法においても認められているもので、その大半が副詞か接続詞である。正書法においてはひとまとめにして書く場合が多い。

(11) domethënë 「すなわち」

will say-inf.

(12) meqenëse 「～なので」 (=duke qenë se 『～ということから』)

be-inf. that

be-gerund. that

(13) me thënë të drejtën 「率直に言って」

say-inf. the right

また、特定の決まり文句にも不定詞が残っている。これらは、まず北部方言に由来する表現であるということが考えられる。

(14) Mos me folë me thumba! 「(他人に) きついことを言うべからず」

not say-inf. with thorn-pl.

(lit. 『刺を伴って言うべからず』)

(15) Me dalë faqebardhë! 「幸運が(あなたに) ありますように」

go out-inf. fortunate

しかし(14)や(15)を見る限り、上にあげたような「表現の地理的出自」を根拠とする説明以外にも考えられることがある。というのも、この用法は明らかに警句やことわざとして使われているものばかりで、特定の時間や場所、特定の相手に対する発話としてはほとんど用いられていないのである(もちろん皆無であるとはいえないが)。集まりの席で不特定の人々に告げる場合や、一般的な道徳律として述べる場合がこれにあたるだろう。例えば、(14)と同じことを目の前の相手に向かって(その相手の常日頃の人間性などにかんがみて) 告げる場合、不定詞でなく命令法を用いて表現することも可能なのである⁵⁾。

(14b) Mos fol me thumba! 「おまえは(他人に) きついことばかり言うな」

not say-imp.sg.2 with thorn-pl.

そこで、標準語において特に不定詞を用いる例は(接続法や希求法を用いる例と異なり)、特定の人称や時制をあらわす必要がなく、より一般的なこととして表現できる点にその特性があるのではないだろうか。特に命令形Fol! 「話せ!」は標準語でごく普通に用いられるもので、それにもかかわらず標準的用法から逸脱した(ように見える)不定詞形が並行

して用いられるのには、上にあげたような発話機能上の理由が考えられるのである。

また、上にあげた例と少し異なるが、集団におけるモットーやスローガン、到達目標などを明らかにする言い回しでも、不定詞構文がいくつか見られることも、この可能性を示している。

(16) Qëllimi është: me marrë pjesë në garë! 「目標は：試合に参加すること」
aim be-sg.3 take-inf. part to match

(17) Me mbetë gjallë... është çështja jonë sot. 「生き残ること…これが当面の課題だ」
stay-inf. alive be-sg.3 problem our today

3.2. 標準語における不定詞構文

不定詞を含む構文の中には、上の3.1.の例だけでは説明できないほど頻繁に用いられる例もある。それらを分類していくと、いくつかの動詞について、確かにそうした傾向が見られる。以下に、Veselaj (2000) および筆者が一般書等で確認した標準語テキストの中から、不定詞の用例が複数確認された動詞をあげておく；

bëj>me bë[rë] する、おこなう	marr>me marrë 取る
blej>me ble[rë] 買う	mat>me matë 計る
dal>me dalë 出る	mbaj>me mbajtë 維持する
derdh>me derdhë まわす	pëlqej>me pëlqye 満足する
fryj>me frye (風などが) 吹く	punoj>me punue 働く
fshij>me fshi[rë] 掃除する	shkruaj>me shkruë 書く
jam>me qenë ~である、いる	shuj>me shue 沈黙する
jap>me dhënë 与える	thyej>me thye 裂く、破る
kam>me pasë 持っている	vendos>me vendosë 決める
laj>me la[rë] 洗う	

例えば動詞 punoj について見ると、次のような

(18) kam punuar 「私は働いた」
have-sg.1 work-part.→work-pf.sg.1

という現在完了の例と共に

(19) kam me punue (punuar) 「私は働こう／働くべきだ」
have-sg.1 work-inf.

(標準語では do të punoi 『私は働くつもりだ／働くだらう』
will work-subj.sg.1)

という例も見られるのである（一方で *kam punue* のような折衷的な例は見られない）。このように「*me*+分詞」不定詞として用いられる例⁶⁾は、標準語の動詞の例にも存在する。

このうち *kam me punue* (*punuar*) については、話者の中で未来形 *do të punojt* との意味的差異がどのように意識されているか興味深いところであるが、それが実際の文例で明確にあらわれているかどうかについては、発話者（や作家）の個人的嗜好も関わってくると思われるので、全ての例で使い分けの基準を明確にするのはなかなか難しい。

ただ、*kam* については一つ手がかりになると思われることがある。北部方言に関する先行研究では、「*kam*+不定詞」の場合に「単純未来 (*simple future*)」としての機能が見られ、「*do*+接続法」の場合はむしろ主語の「意志・意図 (*intention*)」をあらわしているとする見解 (Camaj 1991 他) がある。この場合、

(20) *do të sjellë* 「彼は持ってくるつもりだ」 (意志・意図)

will bring-subj.sg.3

(21) *ka me sjellë* 「彼が（そのうち）持ってくるだろう」 (単純未来・予定)

have-sg.3 bring-inf.

という異なる二つの例が出てくることになる。標準語ではこのような使い分けは（話しことばにおいても書きことばにおいても）ほとんど見られない。もっとも、これは筆者には当然のことに思われる。なぜならば「意志」と「単純未来」を区別する方法は（通常は文脈にも依存することが多いが）「助動詞*do*+接続法」以外の形態が存在するからである。

(20b) *do (të)⁷⁾ sjellë* 「彼は持ってくるつもりだ」 (意志・意図)

will-sg.3 bring-subj.sg.3

(21b) *do të sjellë* / *ka të sjellë* 「彼が持ってくるだろう」 (単純未来・予定)

will-sg.3 bring-inf. have-sg.3 bring-subj.sg.3

いかに標準語における不定詞の機能が予想より幅広いものだといっても、少なくともこのような用例にまでは、北部方言と同様な使い分けは及びにくいだろう。なお、文学テキストで一種「擬古体」として不定詞を用いることも知られている (Kostallari 1973, Çeliku 1998) のだが、これは書き手の嗜好の問題に関わることなので本稿では扱わない。

4. 考察

1970年代以降の標準語制定と普及の過程でアルバニア語の不定詞は、方言の中か、あるいは標準語の中で、ごく限られた条件下でのみその姿をとどめるものと見なされてきた。特に「*me*+不定詞」の形態については、ジェルンド (*duke*+分詞) や未来形 (*do*+接続法) に置き換えることで積極的に用いる必要がなくなるであろうといった趣旨の見解も述べられてきた (Drejtshkrimi 1973, Kostallari 1973 他)。しかしアルバニアに政治的変化が起

こった1990年代以降⁸⁾、不定詞本来の構文を書き言葉においても復活させ、ジェルンドなどとの微妙な意味的差異までも忠実に表現できるようにするべきではないかという主張が、主にコソヴォのアルバニア語学界⁹⁾で見られる (Beci 2000b)。

では実際のところはどうか、という点について考察することが本稿の目的であった。上で示したように、実際には現代語でも不定詞構文は「生き残っている」し、それどころか場合によっては「për të+分詞」や「të+接続法」と並行し、発話機能の区別をも伴いながら、むしろ生産的に用いられていると考えられる (もちろん用例の頻度から言えば『për të+分詞』や『të+接続法』などの方が依然として多いのだが)。このことに関連し、不定詞構文をあらためて標準語の枠内に組み入れるべきとする議論もアルバニア語母語話者の言語問題の一つとして存在するのだが、それはともかく、実際の標準アルバニア語テキストにあらわれる不定詞構文の例を見る限り、現代アルバニア語における不定詞の位置づけについて今後もさらなる再検討が必要であることは間違いない。

*本稿は2002年9月7日、広島工業大学で開催された第32回西日本言語学会において「北部アルバニア語に見られる不定詞構文の特徴」と題して口頭発表したものに加筆・修正したものである。

註

- 1) qëは本来、補文節を導く接続詞であるが、「të+動詞接続法」と共に接続法の一部を構成し、またしばしば省略される。
- 2) ここでは発話された通りに記述しているが、本来の北部方言では「食べる」の分詞hëngërはhângër、「言う」の分詞thënëはthânëという風に鼻母音を含む形となる。
- 3) 動詞dua「欲する」の2人称・3人称は標準語では不変化形doとなるが、北部方言ではこのように本来の2人称・3人称単数形の活用語尾-nを残すものが (特に話しことばで) よく見られる。
- 4) 筆者の知る限り、聖書のアルバニア語訳は、アルバニア語で発行されたもの (Shoqata Shqiptare e Biblës, Tiranë 1995) とコソヴォまたはイタリアで発行されたもの (Drita, Ferizaj 1994) とでは、文体が大きく異なっている。
- 5) 同様に(15)の場合も、希求法を用いた動詞の人称変化形を用いることが可能と考えられる。しかし(14)と(14b)ほどの明確な使い分けは、実際の使用例では確認されなかった。(15b) (Ju) daltë faqebardhë! 「幸運が (あなたに) ありますように」

you go out-opt.sg.3 fortunate

- 6) 実際の用例ではないが、学校などで動詞の基本形をあげるに際しme不定詞を用いる場面が現実にあると指摘する研究者もいる (Veselaj 2000, 51)。アルバニア語圏外で出版さ

れる辞書類で、動詞の基本形を不定詞で表示する例もある (Veselaj 2000, 61ff.)。

- 7) この小辞tëの省略による「do+接続法」の構文が南部方言ではしばしば「意図」をあらわし、特に話しことばで広く用いられる。
- 8) こうした問題が大きく取り上げられた最近の例としては、1992年11月にアルバニアで行われた「現代のアルバニア語国民文章語」と題する国際会議があげられる。
- 9) こうした主張はしばしば地理的・政治的背景を持っているとの指摘も一方で為されているが、本稿では扱わない (Vehbiu 1997, Byron 1976)。議論の中では、例えばアルバニアの首都ティラナがアルバニア語圏の中でむしろ北部アルバニア語圏に属することも意識されている。

参考文献

- Beci, Bahri (2000a). *Gramatika e gjuhës shqipe për të gjithë*. Shkodër: Camaj-Pipa.
- Beci, Bahri (2000b). *Probleme të politikës gjuhësore dhe të planifikimit gjuhësor në Shqipëri*. Pejë: Dukagjini.
- Byron, Janet L.(1976). *Selection among alternates in language standardization: The case of Albanian*. The Hague: Mouton.
- Camaj, Martin (1991). *Lehrbuch der albanischen Sprache*. Wiesbaden: O.Harrassowitz.
- Çeliku, Mehmet/ Karapinjalli, Mustafa/ Stringa, Ruzhdi (1998). *Gramatika praktike e gjuhës shqipe*. Tiranë: Toena.
- Demiraj, Shaban (1986). *Gramatikë historike e gjuhës shqipe*. Tiranë: 8 Nëntori.
- Domi, Mahir(red.) (1995). *Gramatika e gjuhës shqipe I. Morfologjia*. Tiranë: Akademia e shkencave e RSH.
- Domi, Mahir(red.) (1997). *Gramatika e gjuhës shqipe II. Sintaksa*. Tiranë: Akademia e shkencave e RSH
- Drejtshkrimi i gjuhës shqipe* (1973). Tiranë: Akademia e shkencave e RPSSH.
- Kostallari, Androkli (1973). *Gjuha e sotme letrare shqipe dhe disa probleme themelore të drejtshkrimit të saj*. Tiranë: Akademia e shkencave e RPSSH.
- Vehbiu, Ardian (1997). Standard Albanian and the Gheg Renaissance. A Sociolinguistic Perspective. *International Journal of Albanian Studies*. Vol. 1 Issue 1. (on-line)
- Veselaj, Nuhi (2000). *Paskajorja. Çështje e shqipes standarde*. Prishtinë: Dardania Sacra Shtufi.
- 井浦伊知郎 (2001) 「Shkodra地方のアルバニア語話者の表現に見られる統語上の特徴」『ニダバ』30号, 44-52